

えぼっく

第17巻1号通刊93号
2016年1月8日発行

合資会社金井書店発行
営業本部編集

〒161-0033 東京都新宿区下落合3丁目20番2号
TEL 03-5996-2888 FAX 03-3953-7851
URL <http://www.koshoco.jp> E-mail office@kanaishoten.jp

新風

新年明けましておめでとうございます。

目白の街は銀杏の黄色い葉とともに暖かな新年を迎えるました。皆さまにおかれましては、穏やかな新年をお迎えのこととお慶び申しあげます。ご健康で実り多き一年となりますことを祈念申しあげます。

昨年は、31年間ご利用いただいた東京駅・八重洲地下街の店舗を卒業と言う、大きな出来事がありました。いまだに八重洲古書館、R.S.Booksについてお問い合わせをいただくことは、とても幸せなことです。多くのお客様のお役に立てたことの証と、今後の励みとさせていただいております。

本年も新宿サブナード2丁目広場にて「古本浪漫漫」を開催いたします。書物たちとの感動的な出逢いを願いながら用意しましたので、1月8日(金)から1月28日(木)までの5Partをタップリとお楽しみください。10店舗が入れ替わりながら、皆さまのご来場をお待ち申しあげます。尚、今号のえぼっく堂掲載品はPart4にて陳列販売いたします。

この「えぼっく」は金井書店八重洲店と八重洲古書館を運営するスタッフの勉強とお客様とのコミュニケーションツールとして200年3月に第一号を発行いたしました。以来、創作や隨筆、本のこと、八重洲エリアのことなど「八重洲」をテーマにしてお届けして参りました。

いま、創業の地・目白をベースに活動しておりますので、今後は「目白」をテーマとして発行を継続してゆく所存です。引き続きご笑覧いただければ幸いです。

お屋敷町、学生街の目白には、駅近くの飲食店を除くと、御用聞き中心の商店が多くありました。昨今はすっかり様変わりして、コンビニ、美容室、ブティック、居酒屋が増えました。骨董店が集まり、おもちゃ、絵本を扱うお店も現れ、ミニミニ劇場や民家のミニギャラリーなど目白らしさを継承する、新たならしさを育てる空気が漂っています。古書店は当店のみとなりましたが、書物とともにお楽しみいただけるお店は増えておりますので、この紙面でも紹介できればと思います。

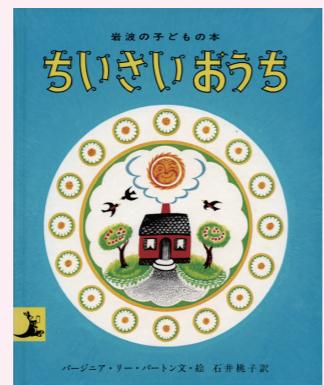
今回は、貝の小鳥・遠藤久美さんに寄稿いただきました。絵本以外にも、ともに旅立ってきた本が並んでいますので、意外な掘り出しがあるかもしれません。是非お立ち寄りください。

目白に相応しい古書店とは…、容易なようで難しいテーマです。目白の町に新風を吹き込む意気込みで、お立ち寄りいただいた皆さまのお知恵を拝借しながら、行きたくなる雰囲気を醸し出していく所存です。

本年も一層のご愛顧を賜りますようお願い申しあげます。
金井書店 花井敏夫

手から手へ

1年の終わりの月がやってくると、大掃除や断捨離が始まり、本を手離す人が増えてくる。長く本棚に眠り、紙魚が浮かんだ本。子供時代、夢中に読んでずっと捨てられなかった本。興味を持たれず、めぐり跡もないままのきれいな本。週に一度の新聞紙と一緒に廃棄するには忍びなく、また別の誰かに読んでもらえれば、という思いとともに託された本の山には、どことなく捨てられてしまった物たちの寂しさが漂う。まとっている埃と気配をささと、時にはごしごしと払い、気合を入れ直し、もう一度商品として店の本棚へ。



長く読み継がれてきた絵本は即戦力、例えば『ちいさいおうち』(バージニア・リー・バートン文・絵 石井桃子訳 岩波書店 350円)。本棚に並ぶとすぐ次のバッターボックスがきてヒットを打つだろう。いぶし銀のような昔話『さるとかに』(神沢利子文 赤羽末吉絵 銀河社 600円)は、おじいちゃんおばあちゃんからお孫さんへの贈り物になるかもしれない。ここ数年に出版されたルーキー絵本『ゆきのうえ ゆきのした』(ケイト・メスナー文 クリストファー・サイラス・ニール絵 小梨直訳 福音館書店 800円)なら、保育を学ぶ学生さんが子供達への本読み練習に。絶版絵本『カロリーヌとおともだち』(ピエール・プロブスト文・絵 小学館世界の童話 7,000円)は往年の名選手のように、しばらく棚に花を添えてから、「ずっと探してました!」といふ

方の元へ。再び手に取られた本が、どことなく誇らしげに店から旅立っていく姿が目に浮かぶ。



店内風景

でも中には、読みに読まれて戦力外となりかけた本もある。シールをパリリと剥がし、印を黒マジックで潰し、出所不明となったものの明らかに図書館除籍となった、この『ひとまねこざる』(H・A・レイ文・絵 光吉夏弥訳 岩波書店 1980年第25刷)。1954年初版の絵本は、今やテレビアニメになり、キャラクターグッズもずらりと並ぶ人気者だ。



「これは、さるのじょーじです。
どうぶつえんにすんでいます。
じょーじは、かわいいおさるさんでしたが、
とてもしりたがりやでした。
じょーじは、どうぶつえんのそとがどんなか
しりたくてしかたがありません。」

と始まる物語、じょーじは動物園を脱出して、バスの屋根に乗って街へ行き、人間界のいろいろを知りたがる。食堂ではうどんを食べ散らかし、忍び込んだ部屋にペンキでジャングルを描き、逃げる際に骨折、病院で探していたおじさんに会い、ついには映画スターと



なるじょーじ。その愛らしく憎めない表情と、悪気のないいたずらの数々。どれほどたくさんの子どもたちが、じょーじの気持ちになって、わくわくときどきはらはらしながらペー



ジをめぐり、怒りながらも許してくれる大人たちにはっと息をついたことだろう。光吉夏弥の訳は、カタカナを一切使わない。あふりか、じゃんぐる、ばす、てーぶる、ぺんき、えれべーたー…その太字で強調されたひらがなの英単語が、じょーじを取り巻く大人たちのように、まるく、あたたかく、読者を包む空気となっていて、いつ読み返しても心がふわりと緩む。そして、子供の頃に味わった気持ちが、あの頃のまま、ころころと転がり出てくる。

こんなに愛しいものの詰まった絵本を、どうしてあっさりと戦力外にすることができようか。迷わず店頭の50円均一箱へ忍ばせてみる。

もうひと仕事できるこの1冊を、心に留めてくれる誰かの手に渡すために。

貝の小鳥 遠藤久美



申年の始まりにぴったりの古い木のおもちゃは、「PATENT BELL」と

ロゴの入ったおさるの引き車。
きっと何十年、何人かの手を
経てきたのだろう。

色が味わい深く落ちている。

そっと動かしてみると、
赤い車輪に包まれた鈴がちりり。
ことこと木の軋む音に合わせ、
体と顔がゆらゆらと揺れる。

元気な子供たちの手には、
もうついていけないかもしれない。
それでもこの屈託ない笑顔を

傍らに置いて、遠い昔の思い出を聞かせてもらいたくなる。
「笑門来福」笑顔の多い2016年となりますように。



【貝の小鳥】

2004年に目白・骨董通りで始めた「絵本の古本と木のおもちゃ」の店。古本は、絵本・児童文学・洋書・エッセイ・文庫など3000冊。おもちゃは、ヨーロッパ・日本の新しい木製品を中心、アンティークリュース品も扱う。店内の小さなギャラリーコーナーでは展覧会を開催、絵本作家やイラストレーター、工芸作家の作品を販売している。

〒161-0033
東京都新宿区下落合3丁目18番10号
TEL 03-5996-1193
<http://kainokotori.com/>

この「えぼっく」は不定期発行です。
送付ご希望の方は5号分として500円切手を同封の上、
発行元にお申し込みください。
企画内容、形態は随時変更されることがありますので、予めご了承ください。